2026 年度　AMDA　モンゴル内視鏡技術協力事業

活動報告

活動期間：　2026 年 8 月 30 日～9 月 7 日



活動参加者　：
小倉記念病院消化器内科主任部長
白井保之（医師）
AMDA 理事長 佐藤拓史（医師）
AMDA 副理事長 難波妙（調整員）
活動場所　　：　モンゴル日本教育病院
　　セレンゲ県総合病院

1. 事業の背景と目的

疫学的にみると、消化器系疾患は、過去 10 年間にわたり、モンゴルにおける罹患および死亡の主要原因の第 2 位に位置しています。また、1990 年以降、胃がんおよび食道がんは、がん関連死亡原因のそれぞれ第 2 位および第 4 位を占めており、現在、モンゴルは胃がんの罹患率および死亡率が世界で最も高い国となっています。

こうした状況を背景に、モンゴル保健省は 2025 年 1 月に、全国民を対象とした早期スクリーニングおよび診断を推進する方針を示しました。これに伴い、消化器疾患、とりわけ胃がん等の早期発見・診断・治療を担う内視鏡医療従事者の能力を、実践的かつ技術力に基づく研修を通じて、迅速かつ継続的に向上させることが喫緊の課題となっています。

この課題に対応するため、モンゴル国立医科大学消化器・肝臓内科部長 Ts. Byambajav 医師をプロジェクトリーダーとして、若手医療専門職を対象とした内視鏡技術向上プロジェクトが実施されています。本プロジェクトでは、シミュレーターを用いたハンズオン・トレーニングを中心に、最新の内視鏡技術を実践的に学ぶ機会と教育環境を提供し、安全で質の高い、地域に根ざした医療の実現に貢献することを目的としています。

さらに、参加者の実践的技能および臨床知識の向上を図るため、世界各国の著名な消化器専門医との双方向のディスカッションや技能交流を積極的に取り入れています。これにより、国際的な知見や技術をモンゴルの臨床現場に共有・還元するとともに、地域における内視鏡診療の質の向上と国際化を促進することも、本プロジェクトの重要な目的の一つとなっています。

AMDA が実施するモンゴルにおける内視鏡技術協力事業は、2017 年 9 月に開始され、COVID-19 の影響により実施を見送った 2020 年および 2021 年を除き、毎年継続して実施されてきました。2026 年の事業は第 9 回目の実施となります。

本年度は、公益財団法人テルモ生命科学振興財団の医療貢献活動助成を受け、これまで主な対象としてきたモンゴル日本教育病院の医師に加え、郊外の病院に勤務する内視鏡医にも参加を呼びかけ、内視鏡診療の技術と知識を共有する機会を設けました。参加医師が日本およびモンゴルの専門医とともに実際の治療およびシミュレーターを用いた実践的研修に取り組むことで、個々の医師の技術向上のみならず、モンゴル全体の内視鏡診療の質および治療技術の向上につなげることを目指しました。

2. 本年度の主な成果

・実際の治療を通じた高度な内視鏡技術の共有と、全症例における合併症のない治療の実施
・モンゴル日本教育病院に加え、複数の医療機関から計 31 名の内視鏡専門医が参加し、研修対象を広げたこと
・シミュレーターを活用した実践的なハンズオン研修による、専門医および研修医の技能向上
・セレンゲ県において約 90 名の医療従事者を対象とした救命救急セミナーを実施したこと
・白井医師のモンゴル国立医科大学客員教授就任など、継続的な医学教育・人的交流の深化

3. 本年度の事業実績



【治療】

内視鏡的静脈瘤硬化結紮術（EISL）3 例、
胃静脈瘤に対する EIS（ヒストアクリル） 1 例
胃静脈瘤に対する EIS（ヒストアクリル）＋EISL 1 例

今回の治療では、胃癌による胃全摘術後の食道吻合部静脈瘤という大変難しい症例の治療がありましたが、すべてのケースについて事前の検査内容を十分に精査し、治療方針を

関係者間で共有したうえで治療に臨みました。その結果、いずれの症例においても治療後の合併症は認められませんでした。

また、今年はモンゴル日本教育病院の内視鏡医 16 名に加え、国立第一病院、第二病院、国立感染症センター、モンゴル国内の区立病院などから 15 名の内視鏡専門医が参加し、計 31 名の医師が研修に参加しました。実際の治療を通じて治療方針や高度な手技等を間近に経験することで、病院の垣根を越えた知識と技術の共有につながりました。





【内視鏡、上部、下部シミュレーター研修】



2026 年 4 月に開館したモンゴル国立医科大学トレーニングセンターにおいて佐藤医師、白井医師による内視鏡シミュレーターを用いた Hands-on トレーニングが実施され、今回の内視鏡治療実習に参加した上記の医師ならびに研修医が参加しました。これまで主にモンゴル日本教育病院を中心としていた研修の対象を、モンゴル国内の複数の医療機関へと広げることができました。内視鏡に初めて触れる研修医には、一人一人に内視鏡の持ち方の基礎から丁寧に研修がおこなわれ、リスクを最小限に抑えたより実践的な研修を受けることができました。両方に参加した郊外の病院の医師たちからは、「今まで知らなかった治療内容の細かな違いが今回の研修を通して明確に知れたこと、そして、シミュレーターで直接治療の指導を受けることができ、ただの治療見学に終わるのではなく、自らの実体験として、治療を学べたことがとても有意義だった。」との声が聞かれました。



【モンゴル・セレンゲ県での救命救急セミナー】

首都ウランバートルでの専門的な内視鏡技術協力に加え、地方医療機関における救急医療人材の育成にも取り組みました。



モンゴル国立医科大学・消化器内科ならびにセレンゲ県総合病院の協力のもと、AMDA 理事長の佐藤拓史医師は、同病院で救命救急に関するセミナーを実施しました。

セレンゲ県は首都ウランバートルから車で 5 時間、ロシアとの国境にある県で、肥沃な土地に恵まれたモンゴルの食糧庫と言われています。

佐藤医師による講義では、救命救急における診断、骨髄輸液や外科的気道確保などの緊急時に必要な実践的手技を行いました。合わせて、モンゴル日本教育病院の内視鏡医から、消化器疾患の救急対応についての講義も行われました。当日は約 90 名の医療従事者が参加。講義と実習を通して、救急医療と消化器救急への理解を深めるとともに、現地医療者からの様々な質問にも答えました。

【モンゴル国立医科大学客員教授就任式】



2022 年から始まった AMDA の「モンゴル内視鏡技術協力プロジェクト」において、モンゴルの内視鏡医療の発展に尽力してきた、小倉記念病院 消化器内科主任部長・AMDA 内視鏡技術協力プロジェクトリーダーの白井保之医師が、このたびモンゴル国立医科大学の客員教授に就任しました。

就任式には、Damdindorj Boldbaatar 学長をはじめ、国家名誉博士の Oyuntsetseg Khasag 先生など、多くの先生方がご出席。長年ともに歩んできた先生方が家族のように喜びをわかち合う、温かく心に残る祝福の場となりました。

白井医師は、「これまでのモンゴル国立医科大学、モンゴル日本教育病院消化器内科との活動や交流を評価していただき、このような形で祝福していただけることを本当に感謝しています。と喜びを語りました。



【AMSA モンゴル（アジア医学生連絡協議会）のメンバーとの交流】



AMSA（アジア医学生連絡協議会）は AMDA の創設者、菅波茂代表が、1980 年に立ち上げた団体です。そのメンバー数は、世界各国 4 万人を超えています。今回、AMSA モンゴルのメンバーと、佐藤理事長、白井医師とともに円座になって学生たちと語りあうひと時を持ち、佐藤理事長からは、ベネズエラ地震の緊急救援活動について、白井医師からは自身で行った下部内視鏡検査の体験について、また AMSA モンゴルの活動について、お互いに共有し、活動を通じて医療を届ける様々な方法とその楽しさについて共有しました。

【モンゴル日本教育病院　病院長への報告】



モンゴル日本教育病院、院長、Prof. BAYASGALAN Purevdorj に本年の活動の内容について報告をしました。ＡＭＤＡが内視鏡事業の前に行っていた眼科プロジェクトの時からＡＭＤＡを応援してくださっている Bayasgalan Purevdorj 病院長から、「大学病院という、次世代育成と医療技術の発展、地域への貢献と様々な役割を担う病院においてこれからも更なるＡＭＤＡの協力を期待したい。」とのお言葉をいただきました。

【駐モンゴル日本大使表敬訪問】



駐モンゴル日本国大使館を訪問し、井川原大使閣下ならびに一等書記官兼医務官・濱﨑真一先生に、今回の内視鏡技術協力事業の活動についてご報告いたしました。
あわせて、AMDA が昨年 11 月、岡山県倉敷市に所在する日本を代表する美術館の一つである大原美術館を擁する公益財団法人大原芸術財団の理事長・大原あかね様から井川原大使閣下宛てにお預かりしたお手紙と大原美術館の図録をお渡ししました。その際、AMDA がこれまで医療分野で培ってきたモンゴルとの交流をさらに発展させ、医療と同様に人々の心を支え、人生に豊かさや生きがいをもたらす文化・芸術の分野においても、日本が有する豊かな知見や魅力をモンゴルに紹介していきたいとの今後の構想をお伝えしました。
これに対し井川原大使閣下からは、医療のみならず、文化、音楽をはじめとする芸術は、人がより豊かに、より人間らしく生きていくうえで、かけがえのない役割を果たすものであるとのお話をいただきました。今回の面談を通じて、AMDA が長年取り組んできた医療分野における国際協力を基盤としながら、文化・芸術を含む幅広い交流へと活動の裾野を広げていくことの意義を改めて認識する機会となりました。
今後も医療協力を軸としながら、文化・芸術を含む幅広い交流を通じて、日本とモンゴルの友好関係のさらなる発展に貢献していきたいと考えています。